

Title	日本における個人と個人主義：トクヴィルを手がかりに(共同研究報告：現代世界研究)
Author(s)	松田, 寿美子
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.20-2 : 21-22
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2417
Rights	

聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

【現代世界研究】
日本における個人と個人主義
—トクヴィルを手がかりに—

2010年6月21日、聖学院生涯学習センターにおいて、22名の参加者の下、本年度2回目の現代世界研究会が開催された。今回は、早稲田大学教授の松本礼二氏をお招きして表題のテーマに基づいてお話をいただいた。概要は以下の通りである。

トクヴィルの「個人主義」の定義は、「個人主義は新しい思想が生んだ最近の言葉である。われわれの父祖は利己主義しか知らなかった。利己主義は自分自身に対する激しい、行き過ぎた愛であり、これに動かされると、人は何事にも自己本位に考え、何をおいても自分の利益を優先させる。利己主義は世界とともに古い悪徳である。ある社会の中に多くあって、他の社会には少ないというものではない。個人主義は民主的起源のものであり、境遇の平等が進むにつれて大きくなる恐れがある。」（『アメリカのデモクラシー』第二巻第二部二章）より抜粋した彼の言葉と共に、日本に個人主義は存在するのかという問題点に触れながら明治期における個人と国民、大正期にいける「個人主義」擁護論、戦後啓蒙における個人と個人主義、経済大国日本について述べられた。

質疑応答においては、哲学者としての個人主張を明確に打ち出した福沢諭吉の『学問のすすめ』、『分権論』、『覚書』や、民主化と自立を説いた丸山眞男の『個人析出のさまざまなパターン』についてのトクヴィルとの関係などにまで踏み込んで



松本礼二 早稲田大学教授（中央）

活発な議論が交わされた。

（文責：松田寿美子 聖学院大学大学院アメリカ・
ヨーロッパ文化研究科博士後期課程）

（2010年6月21日、愛恵ビル）